が隨所に繰り擴げられ、東軍の執拗なる夜襲も、堅固なる我等西軍陣地は勿論、一寸の際も無き警戒線を突破すること能はず、遂に午前零時休戰となれり。

明くれば二十七日午前五時、未だ明けやらぬ闇黒の中を、我等第九中隊は、支隊防禦線たる加納原田に强固なる守備陣を築けり、前日の風雨は忘れたかの如く、晩秋の月は皎々と照り輝き、氷の樣な光を投げつける。冷風肌を裂き、細霧は濛々と立ち籠めて、前途の見透しは利かぬ。折しも一發●二發銃聲は山野に谺すれど、其の後は鳴りを鎭めて不氣味な沈默が續く。再び銃聲は響き渡る。「すは戰鬪開始だ。」と思ふ頃斥候の報告が聞える。—前方五〇〇米、約一個中隊の敵が中隊の方に向つて前進中—戰機愈々熟したか。敵の砲聲殷々と響き渡り、四方に反響して恐しい程である。ダーン●ダーン輕機の音も混つて、執拗にも我等の中隊に向つて射擊が續けられる。味方は一發も發射せず、じつと敵陣を睨みつけた儘小隊長以下全員一團となつて敵に當らんとの決意を眉宇に仄めかしつゝ、中隊長の命令を待つ。尙も敵の攻擊は執拗にも繰り返される。斥候の報告は亂れ飛ぶ。東雲漸く白み、何時しか細霧も晴れて敵陣はくつきりと浮んで見える。今だ！我等一七〇健兒の銃砲は一齊に火蓋を切つた。ダダダ、、、輕機の音、小銃の音。輕機は火を噴き、小銃亦之に猛射すれば、敵は一瞬怯んだかの如く砲聲は止む。今ぞとばかり猛射に猛射を重ぬれば、銃砲聲は殷々と山野に谺し、全く實戰其儘の壯烈さである。機を見て數十米前進し、再び銃を構へ猛射すれば、敵も亦猛烈に應戰する。こゝに火花を散らす曉の攻防戰が、未だすつかり明けきれぬ闌秋の中播平野に展開される。全心全靈を打込んだ我等は、尙も機先を制して前進せんとする一瞬、敵は喊聲もものすごく、閃めく銃劍を擬して肉彈突擊を敢行す。我等も亦遲れじとばかり、全心これ肉彈となつて、必死に突擊し銃劍を交ふれば、休戰ラツパは嘹喨と鳴り渡り、兩軍秘術を盡した攻防戰は、銃後若人六千の力强き雄叫びと共に、榮ある軍國繪卷を閉ぢた。時正に六時半。戰塵おさまれる我等は、一路城南練兵場へと軍を進めぬ。練兵場では、思ひがけもなく、事變勃發以來北支に出征され赫々たる武勳を立てられて、此の程歸還せられた恩師松本先生の激勵の挨拶を受け、我等は勇氣百倍して閱兵分列を終へ、こゝに聖戰下現役將校學校配屬十五周年記念行事に相應しく演習の幕を閉ぢた。

思へば兩二日に亘つて、秋深き播州路に展開された攻防戰は、正に戰線を偲ばすに足る大規模なものであつた。蜿蜒一里に亙る戰線に、かくも大部隊が集結して華々しい戰鬪を繰り擴げた經驗は、私達には未だ曾てなかつた。それだけに興味もあり、亦指揮法が如何に難しいものであるかといふことも充分味はふことが出來た。近代戰は或程度迄は機械化に依

るとは云へ、精神力の重要なることは今更こゝに喋々する迄もない。突擊に、追擊に、すべて旺盛なる精神と、頑健なる身體とが無ければ、到底所期の目的を達成することは出來ぬ。蓋し今回の演習は、大陸に勇戰する皇軍將士の勞苦を偲ばせるに充分であつた。と同時に、大規模の戰鬪は如何に困難なるかを、具さに知ることが出來たし、更に和衷協同の力は如何に重要であるかを泌み〴〵感ずることが出來た。演習中縱橫無盡に田畑をかけ廻つた我等が、疲勞しきつた身體で、三里の道をば一度の休息すら得ずに、堂々二時間足らずで踏破し得たのも、互に聲をかけ合つて激勵しあひ、銃とる手で疲勞困憊した友を勵まし、果は、萎れきつた身に友の銃をも背負つて行くあの神々しい姿も、皆此の精神の現れではなからうか。友情は戰鬪力を倍加する。正に其の通りであつた。我等は全く友の情と、協同精神とに依つて、恙なく今回の演習を終了することが出來たと言つても、敢て跨張ではあるまい。「死んだら骨を賴むぞ」と言ひかはし、一本の煙草も二人で吸ひあひ、大君の下ならば、生命を賭して國に殉ずる其の氣節こそは、我等日本に生を享けたる處のものに、永遠に傳はるべき一大信念ではなからうか。我等は、此の氣節を再び今回の演習に依つて新にすることが出來たと同時に、大陸にある勇士の勞苦が幾分なりとも偲ばれて坐に感謝の涙を禁じ得ない。我等は今回の演習を良き經驗とするは勿論、之に依つて學び得た幾多の敎訓を永久に胸中に留め置き、平素から心身の錬磨を怠ることなく、東亞新秩序建設といふ光榮ある大業を、一日たりとも早く成就して、以て東亞の安寧秩序を圖ると共に、皇統連綿たる我が日本の國を泰山の安きに置いて、國威を世界に輝かす樣、刻苦奮勵一層の努力を致さねばならぬ。

縣下學校生徒聯合野外演習感想文

縣立姫路商業學校第五學年　花光利吉

嗚呼我等が待望せし聯合演習の幕は切つて落され、豊穣なる金波搖ぐ播州平野に、潑剌たる戰鬪が展開されんとするのだ。殊に今年は現役將校配屬十五周年記念として、更に又去る五月二十二日畏くも　天皇陛下には全國學生々徒に對して御親閲を賜ひ、且優渥なる　勅語を賜はつた記念として全縣下を擧げて行はれるのである。我等は一に我等青少年に期待し給ふ　聖慮の洪大なるを思ひ、皇運扶翼の爲負荷の大任を全くし以て　聖旨に應へ奉らんことを期するのである。飜つて又、或は支那大陸に堂々の軍を進め四百餘州を席捲し、或は怒濤猛る廣漠たる支那海に制覇せる皇軍將士を偲びつゝ、

今此の演習を有意義たらしめんとするのである。かゝる意氣に燃ゆる我等姫商軍、校庭に集合して配屬將校竝に校長先生の訓示を受く。我等は唯必死の意氣を眉宇に漲らす。今こそ待望の秋だ。唯ベストを盡して日頃の訓練の成果を發揮し、良好なる成績を擧げよう。感激にうるむ眼に校旗を先頭に、步武堂々校内を出發したのだ。時二十一日朝。我が西軍第一大隊は續々阿彌陀小學校に集合。小憩後命令あり。

「我が德岡部隊田中支隊（第一大隊）ハ龍野ヨリ今此所ニ到着。直ニ三木町方面ヨリノ敵ヲ攻撃ス。敵兵力我ニ同等。航空機數同等。砲兵掩護射撃アリ。第一、第四、第五、第二、第三中隊の順。第一中隊ハ尖兵中隊トシテ國道ヲ東進スベシ。」

直に出發。斥候を西井ノ口、砂部方面に出し敵情を偵察す。敵接近し我軍士氣彌が上に高調す。斥候の報告により、平津にて大隊長より命令を受く。本中隊は直ちに疎開、第三小隊は左翼より包圍隊形を取りつゝ東北に向つて制壓す。前進困難なれど敢然中隊は猛攻を續行す。小銃機銃の銃聲錯綜、爲に草木も震動す。彼我の間益々接近戰機熟す。中小隊長の刀一閃「突撃ニ進メ、突込メ！」喇吶!!突撃喇叭、喚聲播州平野に轟く。之より小憩集合し敵の退却を待つ。更に再び戰鬪開始す。斥候は飛び飛報頻る。中小隊長の作戰直ちに斷乎敵殲滅を期して西脇に進軍す。出發より曇がちなる空模樣終に

强東風に加へ冷雨沛然と斜にあたる。泥中で轉倒する者、溝中に轉落する者あれど士氣益々旺盛なり。西脇近く攻むるも我軍利あらず、一時後退は餘儀なし。東神吉小學校に集結す。時四時數分前。我軍こゝに後退を開始す。第一第二中隊と共に國道を一路西下す。阿彌陀を過ぎ御着に到り上鈴坂元を通過して東阿保に着しこゝに宿營す。此の間の行軍に一同疲勞甚しかつたが物ともせず軍紀嚴肅。足の疼痛もものかは勇躍宿泊地に行進せり。小憩後直ちに夜間陣中勤務、步哨は水も漏さぬ警戒ぶり。十二時演習中止。二十七日拂曉戰、戰鬪最後の華である。斥候も出發、本隊肅々枚を銜んで行く。東山方面に進めども敵影なく拂曉戰は終る。かくて昨日來の戰鬪は全く終了。姫路城南練兵場に至る。練兵場に集結せる七千餘の戰士肅然と整列し、統監閣下の閲兵を受く。有終の美を飾るべく一層の士氣を鼓舞す。かくて東軍より分列式を行ふ。喇吶たる喇叭の音は白鷺城に、森に又其の上に浮かぶ眞白き綿雲に響いて、秋空の下七千健兒は步武堂々行進す。かくて重大意義を有つ聯合演習は、多大の成果を擧げて靜かに幕を閉ぢた。我等は講評に戰鬪中受けたる注意及模範とすべき點を良く考察し、研究努力を惜しまず今後精進進步を期せねばならぬ。又戰鬪中得たる體驗は將來必要不可缺なるものだ。戰鬪間の勞苦、戰鬪動作の向上は、之皆この聯合演習に十分體得し得たのである。時局は豫斷を許さぬ。而して戰時狀態は愈々深刻となる。かゝる時帝國の將來が如何に我等青少年の雙肩に掛つてゐるか今更言ふ迄もない。我等がこの度の聯合演習に示したる氣魄を以て時局に邁進するならば、必ずや帝國の信頼に應へ、將來の大日本を泰山の安きに置き得るだらう。

先に述べし如く、畏くも　天皇陛下の國家將來の隆昌を念じ給ひ、且つ我等に期待し給ふ　聖慮を拜する時我等は之に感泣すると共に一死報國を誓ふのみである。最後に我等はこの度の聯合演習に就き、日頃の成果を考へ更に前途を思ひ一層の精進努力を期して擱筆す。

昭和十四年度縣下學校生徒聯合野外演習について

神戸市立第一神港商業學校第五學年　中本生雄

陸軍現役將校學校配屬令發布十五周年に當る本年は五月に御親閲式を擧行せられ、秋酣の今又大規模な聯合演習が中播平野に華々しく展開せられるに至つた事は大いに意義ある事であつた。

本年度各學校最上級生は實に幸福である事を喜ばねばならぬ。今次の演習を結果より觀察しても銃後青少年の堅忍持久の底力が遺憾なく發揮され、好成績を記錄した事は之又喜ぶべき現象であつた。

强烈な夜行軍によつて東軍が西軍を追撃する情況、齒をくひしばつて默々悲壯な行軍を續ける大部隊の姿、『土と兵隊』その儘の苦痛だつた事を想ひ出す。夜を徹して行はれた夜襲戰に於て彼我兩軍の銃聲は秋冷の空に響き、その中に眠れぬ一夜を背嚢枕に明かす學生の姿、全く前線の兵隊と何等變りはないと思はせられる。十月廿七日拂曉戰は秋氣漂ふみのりの播州平野を硝煙に包んで壯烈な白兵戰を演じた。此處にも見られる若人の潑剌たる意氣、烈々たる熱、之こそ近き將來國家の要求に適つた立派な人物として前線に活躍すべき我等の姿なのだ。賴もしき限りではないか。斯くして本演習の最後を飾る閲兵大分列式は姫路城南練兵場に於て擧行せられ、軍國豪華版とも言ふべき莊嚴華麗な環境に潑剌たる若人が力强い步調を踏みしめつゝ赤誠報國を誓つた。

此の時五月廿二日畏くも宮城前廣場に於て擧行あらせられた御親閲式を想ひ出したのであつた。場所は異れども我等の胸の中より溢れ出る赤心には何等の變化もなく、大練兵場を埋めた青少年の壯觀は明日の興亞の原動力を豫想するに充分なる事を感じた。

統監閣下の御挨拶の一言一句胸の奥深くまで響き、今後一層の奮勵によつて體力學識共に良き日本人としての素質を涵

養せん事を誓つたのである。

今や歐洲の暗雲は全世界を覆ふの時唯獨り祖國日本は、四圍迫害の怒濤を乘り越えて、皎やかしき八紘一宇の大理想の下世界平和建設に邁進して居る。汝の國の將來を卜さんには汝の國の青年を示せ。眞に然り。

此の聯合演習を契機として我等學生々徒は更に一段心身鍛錬に精勵し、國家の將來を磐石の安きに置くの覺悟を新にすべきである。

第一線將兵に最も欲しいと感ずるのは突擊前後に於ける體力であり、旺盛なる精神力であると聞いてゐる。後一歩の地點で倒れる口惜しさ、最後の體力が如何に作戰を意義あらしめるか、之を思ひ之に感じた我々は本聯合演習に於て先づ最初の頑張りを試みたのだ。今後共より强壯な體力と旺盛なる精神力と、更に幹部たるべき智能を啓發せん事を望むものである。

兵庫縣下男子中等學校聯合野外演習について

神戸市立第三神港商業學校第五學年　下村靜雄

十月廿六日、縣下中等學校聯合演習は、現役將校學校配屬十五周年を記念し、秋空あくまで靑く澄み、黃金の波打つ播州平野に壯烈な一大繪卷物として展開された。

加古川で下車した我々三神健兒は集合地である西山へ印南郡平莊村を突切つて、一里半の道を行軍した。埃つぽい田舍道で、友の肩の銃も、肩に喰ひ入りさうな輕機も埃で白く塗り變つてしまつた。西山に着き某寺院で休憩し晝食を攝る。晝食後、直ちに我等二十四中隊の中隊長村田先生より狀況を與へられ、十二時四十分更に一里の道を大宗へと出發したのであつた。秋の田園は色彩が豐かである。沿道の柿は赤く色づき、稻の穗は黃金色に秋風にそよぎ、山々の木々は紅葉する。途中突然右手より「ズドーン〳〵」と銃聲が聞えたと同時に其の方向にぱつと白煙があがる。皆は不思議に思つたが行軍は默々と進む。「小隊長集れ」の傳令が先頭より叫びながら走つて來る。もはや西軍と相當接近したらしい。前方の田の向ふから「ダツダツダツダツ」と力强い機銃の音が秋の澄み切つた空氣を破つて聞えた。

僕は「さあ始つたんだ、」と思ふと、心が緊張し刀を持つ手にぐつと力が入る。今や播州平野を舞臺とする非常時日本の若人の意氣と熱との大白兵戰の幕は切つて落されたのだ。「目標靑瓦の家より左の敵、距離四百、射擊開始」と叫ぶと、横の輕機はすざまじい音を立てゝうなり始めた。銃も火を吐く。ガーン〳〵と彼我の銃聲は入り亂れる。中隊長の前進命令が下つた。小隊は土を蹴つてさつと前進し、さつと止つては射擊をする。更に一前進するともう敵の姿が稻の穗先にちら〳〵と見え始めた。自分の第二小隊は敵の眞正面だ。第一小隊はと見ると、ぐつと右に廻つて敵に對して包圍隊形を取つてゐる。もはや三百だ。銃劍は着いた。今だ突擊は!! 突擊命令が自分の耳をつく。「突擊に!」と叫ぶと皆の腰はさつと浮く「突込め!」我々は前面の敵に對して、如何なる大敵も突き破る勢で「わつ!」と大聲を上げて突込んだ。暫くして味方は豫定の退却をし、道路上に集結し、更に敵との戰は始められた。自分の小隊は、ずつと右に見える池の堤を占領し、敵に對して射擊せよ。との中隊長よりの命令に一刻も早くと山道を走つて堤を占領した。へと〳〵になつて辿りつきすぐさま散開した。其處からは全部の敵を上から下へ見下す有利な地形だ。どん〳〵射擊をする。すると敵も此所を占領しようと、約一小隊が攻擊して來たが上より下への釣瓶打だ。それより夕方迄逃げる敵を追つて急追又急追、日は播州平野の西に沒し、夜のとばりが平野一ぱいに立籠めた。

暫しの休憩の後、二里半强の山道を今夜の宿舍である豐國へと出發する。山又山が自分達の進む前方に覆ひかぶさる如くに、北斗七星の美しく皎く夜空に黑々と聳えて居る。此の邊は電燈も無くランプだ。誰かゞ「鞭聲肅々夜步山道」と云つたが誠にそのまゝだ。銃劍のカチヤ〳〵といふ音と足音のみが夜の靜寂を破る。其の頃から道傍に一人二人と他校の生徒が倒れてゐる。少し廻り道をしたので三里程であつた。やつと豐國の部落の燈火が見え始めた時はさすがにうれしかつた。本校の生徒は一人も落伍をしなかつたのは、日頃四粁耐久競走で鍛へてあるからだ、と思ふと得意になる。其の夜は步哨、斥候等を出し十一時より明朝の四時迄農家の土間に筵を延べて寢た。

翌朝四時起床、四時半には本演習の最後を飾る拂曉戰へと出發する。播州平野は未だ夜の靜寂に包まれて居り、空には星が一ぱいにまたゝいて居る。自分達は肅々と步む。中隊長より迂廻して敵の左側面を衝くとの意圖を示される。其の頃より夜は漸く明けて來たが未だ薄暗い。小隊長は各自の進む可き道を探す爲隊より先へ進んだ。すると前方に敵の斥候らしき者を發見した。敵は近いのだ。敵の銃聲が凄まじく聞え始めた。いよ〳〵戰は始つたのだ。然し西軍の進出意外にも早く包圍隊形すら取り今や東軍の不利は明らかだ。播州平野に眞紅の太陽は東山に出で、山に野に朝霧がぽつと立籠め恰も一幅の卷繪の樣。此處、彼處に銃聲を通して喚聲が上る。ズボンもゲートルも靴も朝露にしつとりと濡れる。自分達の中隊は直ちに敵に對して朝露を蹴つて突擊した。疲れも何も忘れて。彼我の銃聲益々烈しく、朝もやの中から敵と味方の黑い影がつゝと出ては突擊する。東軍、西軍全部が深志野平

野一ぱいに戰つてゐるのだ。休戰ラッパが鳴りひゞき終に戰は終つた。

直ちに兩軍共各々隊をなし、城南練兵場へと向つた。太陽は昇り切つて朝露に輝く稻穗に、農家も、柿の木も、泥にまみれた服も銃も黃金色に包まれる。更に其の太陽が青く澄み切つた秋空を背景に天高く昔のまゝの姿で聳え立つ姫路城を照し出した時、私達は自然の美と人工の美との結合した美しさを見て歡喜に胸は沸き立つた。それより約一里にして城南練兵場に着き閲團分列が行はれた。閲團の後、砂塵を捲き上げ土を蹴つて旗鼓堂々歩む七千學徒の分列は、城南練兵場一ぱいに繰展げられた。其の後講評が有り萬歳三唱の後解散した。

私は本演習に參加し感じた事は、第一に此の演習中に於ける強行軍、戰鬪、夜間に於ける諸行動等の苦しい體驗から、今大陸に苦鬪せられてゐる第一線の將兵各位の上に思ひを馳せ、その勞苦の一入なるを思ひ心から感謝したい氣持になつた事。第二に、銃後青年の意氣と力を十分に表し、本演習が有意義に終つた事。第三は本演習により一層困難に耐へ得る精神力と體力を養成されたる事。第四は戰鬪間に於ける動作の習得である。最後に本校は他校より優れたるものを有する事をしみ〴〵感じたのであつた。

縣下中等學校聯合演習について

兵庫縣豐岡商業學校第五學年　有田敬一郎

現役將校配屬十五周年を記念する、縣下中等學校聯合演習は二十六・七日に亘つて大規模なる想定のもとに、中播平野を舞臺として、花々しい戰場圖繪を展開せしめた。吾等は西軍の第四大隊第十五中隊として、これに參加し得た事を欣びとする。同時に苦しい體驗と新鮮な強い印象を得た。

校旗を先頭に、武裝りゝしく出發する吾等の士氣は旺盛である。これを終始一貫すべきであると思つた。山中で旅路行軍から戰鬪に移るや、胸の動悸は一變して高くうちだした。之を實際の戰場に當嵌めて推察すれば更に興が深かつた。縱横無盡に自轉車をとばす傳令兵の活動と相俟つて、部隊の突擊。戰鬪開始は火蓋をきられた。戰鬪は部隊の結束により勝利を得るものだ。統制なく指揮者に掌握されない部隊では無能である。部隊中の各個が團結心によつて結ばれ、强い信念に貫かるゝ時、全體の力は强大となる。茲に始めて「自己を統御し得ざるものに自由なし」の諺を體得するのである。

吾等が敵と對峙し、攻擊合圖を知らす烽火、輕機の銃聲、擲彈筒の投下に心を驚かす。地平線に、敵の移動が次第に接近する、刹那の緊張は唯必勝の信念に燃えたぎつてゐるものである。これを戰の修羅場と對比する時、更に壯烈なものとなるだらう。雨あられと飛びくる彈丸の中を突擊する勇士を瞼に見る時更に意氣はあがつた。攻擊は指揮者の斷乎たる命令のもとに動く部隊が望ましい。吾等は今後、部隊の掌握に顧慮すべき點が多いと思ふ。突擊敢行は西軍の不利となり、引續き後退する事となつたが、この行軍こそ力强い印象となつた。冷え增す秋の夜、さびしい街道を默々と足を運んだ。心身は共に疲勞を超越した境地であつた。自己の心身に絶えざる壓力と抗し得る、健全性を保持すべき事に痛感したのである。

吾等の旺盛なる士氣を更に高潮せしめたものは、城南練兵場に於ける閉會式の感激であつた。碧空に聳えたつ白鷺城下爽快なる秋空のもとに、知事閣下の閲兵分列の御檢閲を受けた時、吾等の腦裡に稻妻の如く閃いたものは、五月二十二日畏くも　天皇陛下の御親閲を拜し奉つた光榮である。自分はその光榮には浴しなかつたとは云へ、その感激は無量なるものであつた。

色彩鮮かな校旗を先頭に、大隊長の號令一下、燦と輝く銃劍と天地を震動する行進の足音は迫力に充ち、東洋の盟主日本の將來を双肩に擔ふ青年の全貌を遺憾なく發揮した。城の前の姫路護國神社には、英靈が合祀されてゐる。「英靈安かれ吾等あり」の感慨がひし〳〵と胸にせまる。英靈にこたふべき學徒としての道は、青少年學徒に賜はりたる優渥なる御勅語の　御聖旨に則る外にはないのだ。そして只一途にこの道に邁進すべきであると信ずる。

縣下學生生徒聯合野外演習參加の感想

兵庫縣飾磨商業學校第五學年　奥村藤義

我等兵庫縣飾磨商業學校生徒八十九名の精鋭は岡本教官、有本、兼田兩先生引率の下に廿六、廿七兩日に亘り、坂知事閣下の統監の下に全縣下中等學校四十七校、總員七千名の學生々徒を動員して東、中播平野に展開された聯合野外演習に勇躍參加したのである。

參加の前日、本校配屬將校馬場大佐殿より「諸君は今回本校創立以來第一回の聯合演習參加であり、最初の聯合演習であるから演習の要領は詳細に分らぬであらう、がしかし演習の要領は問題ではない。眞面目に眞劍に、凛乎たる氣魄を旺盛にして若人らしく活動せよ」と鋭く訓示された。

北支・中支・南支に、或は討伐に、或は掃蕩に進軍轉戰し任務を遂行してをられる皇軍勇士に劣らざる旺盛なる戰鬪精

神を以て西軍德岡中佐を支隊長に田中少尉を大隊長として、第一大隊第四中隊に我等は配屬し演習に參加したのである。

我々の大隊は廿六日正午「兵數略々我と同樣の敵は三木町方面より西進中にして十二時三十分其の先頭を以て藥栗西端を通過せり、我師團主力は明日正午頃市川の線に進出、彼我の空中勢力は伯仲す。」との狀況の下に大隊長の命令一下行動を起し、姫路高等學校を尖兵とし、縱隊になり三木町方向よりの敵を擊滅すべく前進したのである。

かくて晩秋の播磨平野に、嘗て東京二重橋前にて御親閲を拜受せし名譽ある校旗を先頭にして硝煙に包まれつゝ攻防戰を展開した。

最初の遭遇戰に優勢な西軍は反擊物凄く、東軍第一線は止むなく退却に退却し、午後三時頃天下原附近に總攻擊を敢行したが東軍必死の反擊に西軍の總攻擊は失敗に歸し、漸次退却を餘儀なくされて狀況不利となつた。東軍は好機を逸せず輕機追擊砲の猛射を繰返し漸次戰果を擴大しつゝ西軍を急追擊すべく行動を開始した。

この猛烈なる急追を防害せよとの任務を受けた我等第四中隊は友軍の退却を安全にすべく、死力を盡して抵抗し魚橋附近にて東軍の追擊を一時不能に至らしめた。

退却した西軍は市川堤防東岸部落に露營し、樂しい夕食を握り飯に舌づゝみをうち、暫しの休息もとらぬ内に「部落前面に步哨線を張れ」との傳令を受け、勇を鼓して配備についた。

演習第一日の空は曇り續け、秋冷が身に浸みたが行動を開始すると流汗服を透し恰も夏季行軍の樣であつた。夜は神無月が皎々と輝き夜氣冷凉、其の中を兩軍共意氣軒昂夜襲戰を行つた。明くれば四時頃兩軍拂曉戰を展開、輕機關銃の響、小銃の音に、農村の靜寂を破つて交戰約二時間最後の白兵戰を演じ、大喊聲と同時に、休戰喇叭が鳴り響いた。

かくて演習終了後、兩軍部隊は姫路城南練兵場に集結、閲兵大分列行進の軍國豪華版を繰展げた。

激戰二日の困苦に耐へ、今や知事代理學務部長殿の閲兵を受ける七千名の若人は、毅然として不動の姿勢をとり、嚴肅そのものゝ光景であつた。閲兵終つて壇上に立たれた副統監殿に向ひ、進軍ラッパの音に和し、二列横隊の若人が、大地を踏みしめ、劍光帽影燦と輝き勇壯なリズムに和して白鷺城下に軍國圖繪を描いたのである。

最後に統監の訓示、指導部長井口大佐の講評終り、遠藤少佐の所感あり、萬歲三唱、十時半感激深き演習の幕を閉ぢた。

思へば今回の支那事變勃發以來、堅忍持久、國民精神總動員、總親和が叫ばれ、長期建設、新東亞の秩序樹立が唱へられ、我々國民は文字通りこの難局に處すべく滅私奉公の誠を致し努力すべきである。此の時に當り、特に意義深き聯合演習に參加したる我々は、或は夜露に濡れ飢餓に耐へ、足に負傷しつゝ忍苦鍛錬、以て困苦を超越し、些かなりとも剛毅大膽なる氣魄を錬磨し、凛乎たる決斷力を養ひ得たる事は、中堅國民として國家の干城となるべき一大鍛錬であつたと、新たに燃え立つ希望、沸き立つ歡喜、羽叩く勇氣に心をたぎらせるのである。

現役將校配屬令十五周年記念聯合野外演習

報德商業學校第五學年　松井章雄

秋闌な高砂平野に非常時青年の意氣いよ〳〵高く、知事統監による現役將校學校配屬令十五周年記念學生々徒聯合大野外演習は、十月二十六・二十七日の二日に亘つて行はれ、本校も西軍第五大隊第二十二中隊として參加した。

二十六日、岡本第五大隊長より訓辭を受け、御着驛より荒神谷方面に向つて進發、十時半頃荒神谷中央に達す。此所にて十一時半迄休憩後同所出發荒神谷東端に達し、西軍左縱隊第一線の中隊が集結、我が二十二中隊は三木方面に向つて進軍「只今より狀況開始」となる。午後二時三木方面より西進し來つた敵の左翼を突くべく、志方村の線にて第一線となり展開對峙應戰する事一時間、遂に三時攻擊命令下るや進擊亦進擊、同三時二十分兩軍主力の距離僅か二百、忽ち起る銃聲は平和な村落を震駭せしめ士氣愈々旺盛、三時三十分「進メ！　進メ！」の號令と共に果敢な突擊を敢行し、こゝに壯烈極まる遭遇戰を展開、志方平野一帶に喊聲高く上り、第一第二第三小隊は凄まじき喊聲を揚げて敵と衝突し、兩軍肉彈戰に移り其のまゝ敵と對して狀況終りとなる。敵は西軍の突擊により退却、亦も戰鬪が行はれた。前に打つて變つた東軍の猛擊に我が軍は一應佐良和の線まで退却することゝなる。時正に五時前、第十九中隊先頭編成順序に三里の行程を市川左岸の線まで退却、佐良和に到着した時には夜の帳はおりて眞暗である。こゝにて陣地を布き夜の配備につき民家を借りて宿營食事、明日の作戰等を講じ、夕食後直ちに第一小隊は十二時迄相合池附近にて敵襲に對する爲に夜間警戒をなし、支隊左翼の警戒に當つた。

明けて二十七日午前四時、半眠りの我々はあかない眼をこすり乍ら起床、直ちに第五大隊は全員武裝を備へて進軍を開始し、佐良和村相合池に向つて西進し來つた敵を粉碎する目的で、相合池南端に進み同地で待機してゐた。約半時間の後突然パーンと銃聲、我も遂に戰鬪行動に出で小時間にして敵と遭遇、互に最後の物凄い戰鬪が行はれた。重機、輕機、小銃の音、森閑たる空氣を破つて火藥の爆裂する音、時に午前

六時我等が第二十二中隊は、校旗をおし立て群がる敵を蹴散らす如く進擊、夜露の降りた稻の海を横切ると服はびしよ濡れになる。一瞬にして今までの銃聲は殆んど止み、最後の突擊だ。我と相對する某校の東軍と、猛烈なる肉彈戰が行はれる。白々と明けて朝日は美しく佐良和平野にも夜が明けた。「ワアーワアー。」此所彼所にも突擊敢行の聲だ若人の聲だ。この時戰鬪終了ラッパ鳴り響き中隊ごとに整列、直ちに東西兩軍共に市川河原へ前進、河原にて朝食後姫路城南練兵場に向ふ。空に一點の雲もなき日本晴。朝の太陽に照らされ一層雄大美觀の姫路城下城南練兵場にて副統監殿の閲兵、續いて分列行進、今までの疲勞も見せず意氣揚々として行ふ。後講評があり式辭、訓辭あり。二日間に亘つて行はれた大規模なる演習が十時半遂に終を告げたのである。

此の僅か二日間に於ける戰鬪に、身も心も疲れ切つた我々は今更乍ら支那の曠野に敵と戰つて居られる皇軍將兵の御苦勞が眼前に浮び、その艱苦如何ばかりかと眼の熱くなるのを覺えた。

我々一同は重ねて出征兵士の武運長久を祈ると共に、銃後の守りとして國家の爲に盡す決心を愈々深くしたのである。

縣下學生聯合演習の感想

中外商業學校第五學年　雨宮幸一

陸軍現役將校學校配屬令公布十五周年記念として、本年度の縣下學生聯合演習は、聖戰下若人の血の躍りが脈々として中播平野に於て展開された。本校も參戰凡ゆる苦鬪、困難に打克つて風雨何者ぞ、銃後青年の意氣を示した。思へばあの東志方より國分寺に至る夜間急追擊は、日頃錬磨に錬磨を重ねた我々に取つて申分なき試練であつた。精魂の限りを盡して奮鬪力戰、追擊亦追擊！　國分寺に於ける食事の味は實に風味中の風味を味ひ、今更乍ら激戰後の痛快を覺えた。戰地の將兵も斯くこそと心は戰線に走つた。拂曉の總力戰は全線火花を散らし、戰術の眞髓を盡して言語に絶する痛快さであつた。練兵場に於ける閲兵は勿論分列式は嚴肅その物で、講評も良好であつた。分列式は我々心身綿の如く疲れたるにもかゝはらず「進め」の一令で新な精氣が滿ち溢れ、自然と足の躍動するを覺えた。我乍らよく出來たと喜びが面に現れ獨り微笑を禁じ得なかつた。斯く終始一貫、熱と忍耐とが一致して其の精神が全部火の塊となり、本演習が有意義に終りたる事も、日頃の練達に依るものと深く〳〵信じたのであつた。我等は本演習に於て鍛へたる心身を以て、卒業後社會に處するの覺悟を今更ながら一層深めた次第である。

聯合演習に參加して

縣立工業學校第五學年　松田富夫

ラッパの音に我々の胸は高鳴る。此處城南練兵場にて六千の若人の感激の一瞬だ。秋空には其の壯觀を見守る如く、二ツ三ツの白雲が棚引いてゐる。此の大分列中の自己を思ひ、「快かな。」を叫びたくなる。昨日より本日にかけての大演習が恙なく終了したのだ。あんなにも以前より期待した演習も最早終つたのだ。昨日よりの行動が走馬燈の如く頭の中をかすめる。

思へばあの夜間行軍の時はつらかつた。又あの遭遇戰の時は壯快だつた。我等兵工健兒は東軍多田支隊第四大隊の第十八中隊として演習に參加した。高砂で下車してから約二里半第四大隊の集結地たる、一小學校に到着してより、直ちに晝食を取り、十三時益々待望の演習の幕は切つて下された。我々は尖兵中隊として、頭から埃を浴びつゝ行軍をする。兩側には旱魃も何のそのとの顏をした稻の穗が、我等を犒ふ如く頭を下げてゐる。「駈足」足がずき〳〵痛い。足がもつれだして來た。やつと速歩になつた。一度の小休止もなく唯々我々は少しでも、敵よりも有利な地形を獲得せんものと默々として進む。砲の音がして來た。赤山の向ふ側に最早敵が來て居るとの事、我々は直ぐに赤山の頂上を占領した。朝からの行軍でへと〳〵である。然し目前に西軍の白帶を見ると、一瞬に新たな力が湧き出てきた。それは前もつて遭遇戰に對し期待してゐた大なるエネルギーだ。我々は射つた。折柄白雲の多かつた空は黑雲に蔽はれ、大粒の雨が降り出した。稻が大きく左右に搖れてゐる。松葉が頰を刺す。强風だ。頭の中に、第一線に働いて居られる將士の姿がまざ〳〵と浮んで來る。それより大遭遇戰、防禦戰を展開し、十六時頃追擊の隊形で一路宿營地へと向ふ。折柄、西空には我々の意氣を表現する如き夕燒が眞赤だ。我々は又、默々と行軍を續ける。唯さく〳〵といふ靴の伴奏と埃を浴び乍ら。最早あたりは薄暗くなつて來た。そして瞬く間に夜のとばりは落された。丁度防空演習の爲、電燈の明りは見えない。然し永劫の燈たる月が煌々と冴え渡つてゐる。如何にも我々の强行軍を勞はる如く。又、稻の穗をわたつて來る風も、如何にも「御苦勞さん」と私語やくやうに優しく頰をかすめる。少し落伍者が出て來た。我々は一人も落伍者を出さじと勵まし合ひ乍ら宿營地へと向ふ。一山廻れば又山、山、最早足は無意識の中に身體を運ぶ。ほんとに皇軍將士の御苦勞が思ひ出される。かくして二十時頃宿營地着、そして休みもやらず直ちに宿營準備に取り掛る。二十四時頃やつと寢につく。翌朝四時起床、又もや二粁程行軍して曉の大遭遇戰だ。露が身に滲みる。畦に身を

伏せて射つた。何といふ壯快さだ。自分も第一線に來てゐる様な錯覺に捉はれた。突擊だ。腹一杯の大聲で「わあつ」と叫んで突込んだ。嗚呼感激の一瞬。何時迄もひたつて居たい氣持で一杯だ。かくして我等の大演習も終つた。次いで大分列式も盛大裡に終了し、茲に本聯合演習の幕は大感激裡に全く閉ぢられたのだ。

本年は特に學校配屬將校配屬十五周年記念の大聯合演習であり、それに參加し得られたのは何たる幸福であらうか。而も指折り數へて待つてゐた此の演習を、恙なく終ることが出來た事は此の上ない喜びだつた。それにしてもあの大强行軍はつらかつた。しかしそれにより將士の御苦勞が身にしみた。そして此の體驗により精神力の偉大さを味ひ、一旦緩急の際には立派な一日本人として、働き得る自信が出來たのは大きな收獲だつた。これこそ我等の頭より永劫に去らない愉快な思ひ出となるであらう。

今や現今の日本は超非常時に直面してゐる。我等は何としても身體が健全でなければならぬ。私は此の有意義なりし聯合演習を終へるに當り、以後自己の身體に益々意を用ひて、今回有難くも我等青少年學徒に賜はりし　勅語の　御聖旨を奉體し、立派な大日本帝國臣民となり　皇運扶翼に邁進しようと思ふ。

聯合演習について

縣立農蠶學校第三學年　筑谷　勇

校旗を先頭に堂々演習場に向ふ。數臺の飛行機が紺碧の空に銀翼を伸して、爆音勇しく翔んでゐる。

德岡中佐指揮の下に基地を出發、午後三時志方村にて遭遇戰を展開、稻實る播州平野を、我等若人の雄叫びに埋め、折しも降り來る秋雨を退けつゝ、高邁の心事を持し、雄大なる方圖の中に、小敵たりとも侮らず大敵たりとも怖れずてふ眞勇を以て敵陣へ突入する。が、然し審判官の命により涙をのんで市川東岸迄退却を行ふ。悲憤の氣慨に、誰一人として聲もない。健脚部隊歩調一齊、坂を越え、茫々たる大平野を踏みにじり、管制下の漆黑の宿營地に到着、直ちに食事、握り麥飯の味、その時位美味しく感じた事はない。軍隊生活の持つ大きい幸福の一つである。健全な人間は困苦缺乏に堪へて始めて養成されるのだと、しみ〴〵思ふ。

清らかに澄み切つた月の下、蚯蚓の聲、水の音、靜寂だ。小哨勤務に襲ふ寒氣も物かは、蟻をも通さじと己が任務に萬全を期し、爽々しい氣持ちに張切つて無事狀況を終る。白く浮ぶ道を靜寂を破る銃の音、意氣揚々引上げて夢路を辿る。

午前四時半起床、直ちに昨夜の位置へ散開、小屋も、森も、部落も一つとして見えない。原は思つたより更に廣い樣だ。實る水稻に露をおいて、服は何時か濡れて居る。

悪寒が全身を襲ひ、銃が常より一層冷い。空腹を感じる。然し大陸の第一線に在る勇士の勞苦を偲びつゝ頑張り通す。

パン〳〵、駐止斥候の信號に、すは敵來れと、味方の用意はをさをさ怠りない。

タタ、、、、、輕機關銃が耳を裂く、小銃が火を吐く、敵だ。突擊準備完了、胸が高鳴る。「突擊に！」よし行くぞ、草を確りと握る「進め！」大地も割れよと渾身の力を脚に蹴出す。體、銃劍一體となり彈丸の如く無我夢中で敵陣へ「ワー」敵全滅。休戰ラッパは秋空に嘹喨と響き渡り、大攻防戰の幕は閉ぢたのだ。

姫路城南練兵場に集結、知事閣下代理の閲兵分列を受ける。我等の魂こもる校旗を先頭に、ラッパに合せて大地を踏んだ。劍光帽影、燦として輝き、由緒ある白鷺城は天空にくつきりと聳えてゐる。

「頭―右」唯夢中。

整列してホッと氣付くと、總勢七千人の力强い若人の精鋭、あゝ小さい自分も此の一員であつたのだ。講評、訓示、所感それぞれの後、口も裂け、白鷺城も崩けと、

天皇陛下の萬歳を三唱し奉る。時に午前十時半。

何時しか汗ばんだ體をふきとり、端正なお城を見上げながら、我使命の重大を自覺し、克己と忍耐に鞭つて自疆息まない人にならねばならぬと、堅く〳〵心に誓つた。

若く、そして赤い血の流れてゐる我等は、まだ未成品である。完成に達せんとする努力の過程にあるのだ。秋恰も故國は肇國以來の大難局に遭遇して居るのではないか。

此の時　聖上には辱くも我等に優渥な　勅語を賜ひ、青少年學徒の進路をはつきりお示し下さつたことは、　大御心の程、恐れ多き感激の極みである。

國家の盛衰消長は一に青年の意氣に關すとは、洋の東西を問はず、古今の歴史が明かに證明してゐるところ。我等は此の　御勅語の意を體し、よくその本分を守り、學業を勵んで一歩たりとも世界各國青年に讓らず、進んで最も優良有爲な青年となり、皇國の進運を翼贊し奉り、黎明大日本の將來に決死の奮闘をせねばならぬ。

連合演習に參加して

縣立佐用農蠶學校第三學年　鎌田　要

待ちに待つた十月二十六日、學校配屬將校設置十五周年を記念する縣下學生々徒聯合演習の初日である。我等第三學年生徒は七時半校庭に集合し、彈藥夜食等の配給を受け、又演

習に關する諸注意を承り、八時二十六分佐用發列車で勇しく出發した。車中は緊張そのものゝ力が溢れ、さながら實戰に參加する皇軍部隊かのやうに思はれた。途中、本龍野で龍商の生徒も乘つた。姫路で東海道線に乘り換へた。姫路高等學校、姫路中學校、姫路商業學校、飾磨商業學校、本校の五ケ中隊を以て成る第一大隊は曾根で下車し、東方約一粁の地點にある阿彌陀小學校に集合した。時に十時半。同小學校で晝食を取り十二時再び集合、大隊長より命令を受け、十二時半自轉車斥候は出發した。狀況に移つたのが十三時であつた。行軍順序一・四・二・五・三中隊の順であつた。姫高の第一中隊が尖兵中隊となつた。尖兵中隊が船頭附近に到達した時には盛んに銃聲がした。第五中隊は直ちに國道の右に散開した。猛烈なる射擊及び突擊に依り東軍を擊退し、加古川橋西端附近で抵抗した敵は、一先づ大原投松、天ケ原、山條の線に退却した。西軍は之を追擊すべく折柄の雨に大陸の戰線を偲びつゝ追擊又追擊、敵をして抵抗の暇をなからしめた。

次に狀況は變り西軍の後退となつた。第五大隊は加古川の西の堤防を南下し、國道に沿つて西し、曾根驛の東方約二百米程隔つた踏切りを通り、大鳥より急な山道を通つて見野に出、中鈴、下鈴部落を過ぎ又、山を越した。山道の右側には墓が非常に多く無氣味な所であつた。頂上に着いた時分には日はとつぷりと暮れ、腹は空き、夕食の號令を待つばかりであつた。下りは道が非常に惡くて困難だつた。墓の前を通り丈なす雜草を押分け、更に松林のほの暗い山中を進んだときの感じは今も忘れられない。十九時半、奥山の露營地に着いた。豫定の時刻より非常に速く着いたのであつた。これも平素實習により心身を鍛へ、又度々行軍や遠足をして山野を跋渉し訓練をしてゐるお蔭である。直ちに夕食。その時の日の丸辨當の味のよさは一生忘れられない。夕食後各分隊毎に飯盒を集め、婦人會の人達に飯を詰めて戴いた。少憩後、糸引小學校の敵を搜索すべく行動を開始した。月夜であつたので敵の歩哨線をくぐることは困難であつた。小學校には多數の敵が居るらしいといふので、その威力偵察をせんとして二回までも突入した。然しこちらは無言であつたが、敵は喊聲を發してゐたので審判官から注意を受けてゐた。我が第五中隊は支隊の最右翼であつたので、敵の左翼を我が支隊の後方に入れてはならない責任があつたから、そのつもりで綿密に搜索したのであつた。兩軍は相對峙し、大陸戰線の先輩を偲びつゝ一夜を明したのであつた。睡眠中には三十分交代で二名づつ不寢番を立てゝゐたことは言ふまでもない。

二十七日四時起床、飯盒を背嚢につけ、露營地附近を掃除し、五時より行動開始。先づ昨夜搜索した小學校の敵を又搜索した。どうしたことか敵は居ない。そこで第五中隊は東山、明田を過ぎて四郷村に入つた。東の空は明るく、四方の

山には霧が棚引き心地良き曉であつた。敵はと見れば、居る居る、數百米前方だ、駈歩を以て敵左翼を後方より攻擊した。敵は驚いて抵抗し始めた。輕機も小銃も射つた。射つた。最後に勇敢なる突擊を敢行し、多大の戰果を收めることが出來た。糸引村より四郷村まで相當の距離があつたが、我が農蠶健兒の健脚により敏速に敵の背後に進出する事が出來たことはほんとに喜ばしい事であつた。各所に實戰さながらの大遭遇戰を展開し、曉闇の白兵戰を演じた。

戰鬪も終り市川の川原へと行軍した。川原で朝食を濟ましし城南練兵場に向つた。

天下に響く名城白鷺の名も美しく姫山の松の綠に聳ゆる天守閣を眼前に仰ぎ、一點の雲なく澄みきつた大空の下に、歴史的大繪卷たる若人七千の閲兵の幕は切られた。東軍の第一大隊より順次に行はれた。大隊長の「氣を付け!!」の號令に全員不動の姿勢も凛々しく、ぴりつとも動かない。「頭!右」第一大隊の眼は統監代理森本學務部長殿へと集中した。顧問の遠藤、大場の兩少將閣下及び、二十數名の將校方の一隊は我々の前を過ぎられた。「直れ」の號令により頭を戻す。中隊長の引率で分列位置に行き、大隊長の號令により發進。嘹喨たるラッパの音に合せて堂々と行進する樣、勇往邁進の氣慨充溢し若人の意氣潑剌たるものがあつた。小隊長の「頭!右」の號令に從つて全員の眼は再び、學務部長殿へと注がれた。所定の場所に着くや、指導部長第十師團司令部井口中佐殿が御講評をされた。我々五中隊の戰鬪如何かと、神經をとがらしてゐると「二十七日拂曉の演習に於ける佐用農蠶學校の戰鬪良好と認む」といはれたときの嬉しさ。何と言つて良いやらわからない。農業學校の中お褒めの言葉を戴いたのは本校のみであつた。全員が協力一致、終始一貫、眞面目に行動をとつたからである。

森本學務部長殿の御訓示、及び遠藤少將閣下の御所感があり 天皇陛下の萬歲を三唱し、十時半本演習は完く終りを告げた。

聖戰の眞只中、かくの如く餘裕綽々たる皇國に生を享けたる我等は、 皇恩に感謝すると共に自己の修養に努め、善良なる日本臣民、興亞の大國民となり、君國の爲に身命を忘れ報恩の誠を致さんと、深く〳〵心に誓つた次第である。

聯合演習の感想

縣立淡路實業學校第三學年　藤　永　五　一

十月二十五日、我等第三學年は午前中に全部の準備を終へて、二十六・七日の中等學校聯合演習に參加すべく、正午勇躍富島港を出發した。海上低く垂れこめた暗雲、吹き荒ぶ潮

風、飛び散る飛沫。しかし我等は元氣であつた。銃を固く抱きしめて襲ひかゝる潮飛沫を防ぎながら、明日の壯烈な演習を思ひ浮べて躍動する血潮をどうする事も出來なかつた。

やがて明石に上陸、隊伍を整へて停留場へと進む。道行く人々は嚴しい武裝に身を固めた我等に、驚異の視線を送つて過ぎて行く。我等を乘せた電車は黃金の波打つ稻田の眞中を疾走し、程なく目的の加古川に着いた。今夜はこの加古川中學校で一夜の宿を借りるのだ。武裝を解いて道場に入る。日はだん／＼と暮れて行く。生憎防空演習だ。カバーを掛けた電燈が中央に一個。薄暗い道場で冷えた握り飯に舌鼓みを打つて腹をこしらへる。

電燈の下に圓陣をつくつた皆は、何か一生懸命に見入つて居る。地圖だ。演習地の地圖だ。彼等ははや明日の作戰計畫をやつて居るらしい。隅の方でもこそ／＼と話聲が聞える。明日の演習の事でも話し合つて居るのであらう。やがて演習の夢でも見て居るのであらうか。皆は靜かな眠りに落ちて居つた。

明る二十六日、加古川右岸を上つて午前十時、指定の平莊村に集合、支隊長の命を受け東軍第五大隊第二十三中隊として隊伍を改め出發、山又山の惡路を侵して前進に前進、大原の峠を下るや「ドドン！」突如四方の靜寂を破つて響きわたる銃聲一發、愈々敵と遭遇したのだ。命令一下、大隊、中隊

小隊と散開して行く。足の痛みも何のその、またゝく間に中隊は一線に出て行つた。

左隣は洲商の第二十二中隊、その左は洲中の第二十一中隊第三神港の二十四、北神の二十五中隊は第二線である。我が中隊は大隊の最右翼である。前進！稻の間を縫つて進む中隊は間もなく敵に近迫した。傳令は右に左に一寸の暇もない。敵は點々と眼前に展開してゐる。我が輕機は火蓋を切つた。敵軍壓しと吠え立てるその物凄さ、天を壓し、地に響き、敵の氣勢を挫く。我が軍の士氣益々擧る。實に頼母しき限りである。彼我銃火を交へる事久しく、銃聲は稻穗を搖がせ、野越え、山越え、何處迄も／＼響いて行く。突如小隊長より下る命令、自分は躍り上つて喜んだ。愈々我が分隊活躍の時來る。「駈歩—前へ！」あるだけの聲を振りしぼつて叫んだ。敵の銃火の中を潜つて素早く、小隊の左一線に出た我が分隊は一齊に射擊を始めた。敵は正面だ。我が位置は小高い堤の上で、射擊には好適の地點だ。敵は愈々近づいて來る。突擊だ。瞬間我等の血は躍つた。「ブルツ！」と一振ひ、武者振ひだ。銃劍が光る。凛然と響く突擊の號令、忽ち湧上る歡聲、その凄じさ、その勇ましさ、敵もさるもの指揮刀を振翳した小隊長を先頭に突込んで來る。將に倒すか倒されるかの瞬間だ。實戰ならば敵の二人や三人は突殺してやるのだが……。此所彼所でも勇壯な喚聲が天空に響きわたる。どんよりと曇つてゐた空は、何時の間にかポツリ／＼と大粒の雨となつてしまつた。

つるべ落しの秋の日は西の山にかくれんとして居る。邊りに立籠めた暮色は眼に見えて濃くなつて行く。敵は遂に退却を始めたのだ。しかし前方の山麓では尙相當强く抵抗してゐるらしく、頻りに輕機や銃の雄叫びが聞える。時たま耳をうつ叫號。

休む暇もなく東軍は追擊にうつゝた。日はとつぷりと暮れてしまつた。そして愈々山の中だ。ぶつ續けの戰鬪に强行軍腹は空く足は痛む。足の裏には豆の數がふえて行く。重い背囊は肩をもぎとられるかの如く、銃の重味が身にしむ。腕はしびれさうだ。道の兩側には何處の學校か知らないが、耐へられなくなつて倒れた者が一人二人と眼につく。しかし我等は頑張つた。足の豆を踏潰し、足の痛みを忘れ、空腹を忍んで最後迄頑張つた。その甲斐あつて幸ひ一人の落伍者もなく無事宿營地の豊國に着き得たのである。

一寸の休息もなく直ちに警戒勤務に着くのだ。天幕を張り飯盒炊事も始めた。皆自己の苦みを捨て足を引きずりながらも默々として勤務についた。きつと腹の中には何一つも殘つて居なかつたであらうと思ふ。炊事を終つて暖い飯盒を抱いた時の嬉しさ、その香を嗅いた時の皆のにこやかな顏、恰も鐵の磁石に吸着く如く、蓋をとるや遲しとばかりにかぶりついた。副食物等十分でない。しかし今はそんなものは問題ではなかつた。一わたり食つて漸く人心地が着いた時、自分は俄に晝間の疲れを覺え、眠氣に襲はれた。だが自分は斥候の命を受けてゐるのだ。斥候の任務が殘つて居るのだ。さうだ。腹が出來れば斥候だ。

「しつかりやれよ。」と友に勵まされ、他の四名と共に元氣よく出發した。空を仰げば、雨は止んで雲の間から洩れ出づる月は、我等を勵ます如く青白い光を投げて居る。何處かで「誰か！ 誰か！」と歩哨の誰何する聲が月光を傳つて耳に響く。「御苦勞」と味方の歩哨線を出てしばし、前方五十米と離れない所に黑い影、うん敵だ。右にも左にも。もう斥候は一歩も進めない。遠くで銃聲が聞える。四大隊の方らしい。十一時頃演習中止の傳令を受けた。

天幕の中にごろりと横になつた。一枚の莚を透して冷えわたる土の上、毛穴もよだつばかりだ。蒲團はない。皆は一塊になつて寢た。自分等の寒さを思ふにつけても、戰線の將士の勞苦困難が思ひ出されて、今更ながら感謝の念が高まるのである。

暫しまどろむと思ふ間もなく、明くれば二十七日、時計はと見れば三時少し廻つた許り、もう皆眼を覺ましてゐる。やがて天幕撤收、武裝、整列、またゝく中に終つて、頭に星を頂き、露を踏みしめて戰鬪準備にかゝる。夜はほの／＼と明

け初めて拂曉戰は開始された。銃聲は朝の空氣をふるはして山又山に木靈する。躍進又躍進、そして喚聲、休戰ラッパを最後として戰鬪は終つた。

朝餉の煙立つ中を七千に垂んとする若人が、續々として市川の河畔に集つて行く。飯盒に顏を突込んで朝食を終へればすぐさま姫路の城南練兵場に行進だ。我等は晴の入城式を行ふ戰勝勇士のやうな爽快な氣分で一杯だつた。思へば今日はあの漢口攻略の日である。當時國民は歡喜の叫びをあげた。しかし我等はその蔭に涙ぐましき皇軍の活躍あるを忘れてはならない。

練兵場に集つた七千の精鋭は威儀を正して整然と閲兵分列を受けた。疲れきつた足は最早一歩もと思はれたが、輕快なラッパの音に誘はれて、日本男兒此處にあり。と最後の元氣をこの一機にこめて校旗を先頭に足も碎けよと踏み着けた。

畏くも　天皇陛下には五月二十二日、我等學生々徒に御親閲を賜はり、又優渥なる　勅語を下し給うたのである。我等非常時青年は宜しくこの　聖旨に副ひ奉る可く、精神の緊張と體位の向上に盡し、以て他日國防の第一線を守らねばならないのである。この意味に於ても今回の聯合演習は甚だ意義深いものといはねばならぬ。

兵庫縣下學校生徒聯合野外演習實施概要

（演習規定ニ據ル）

第一　演習ノ次第

一、本演習ハ現役將校學校配屬十五周年記念事業ノ一トシテ縣下印南平野ニ於テ實施ス

二、演習ノ次第左ノ如シ

自十月二十六日十三時
至十月二十七日十一時　戰鬪教練閲兵分列及講評訓示

第二　編成及裝備

一、統監部ノ編成ハ附表第一ノ如ク指導部竝ニ審判官ノ編成ハ附表第二ノ如シ

二、部隊ノ編成ハ附表第三ノ如シ

三、服裝ハ各學校適宜トシ空包及所要ノ天幕、水筒、飯盒竝ニ糧食ヲ携行スルモノトス

銃器ノ不足スル學校ニ在リテハ舊式銃ヲ使用セシムルカ又ハ附近青年學校ヨリ教練銃ヲ借用シ尙ホ不足ノ場合ハ輕機關銃、擲彈筒分隊彈藥手竝ニ指揮班、救護班等ノ小銃ヲ省クモノトス

四、各學校ハ可成校旗ヲ携行スルヲ可トス

第三　標識

一、統監部竝ニ指導部隊員及審判官ハ連合野外演習ノ集合ヨリ解散迄左腕ニ白布ヲ纏フ

二、西軍ハ帽ニ白帶若クハ白日覆ヲ附スルモノトス

三、中隊長以上ハ其ノ職名ヲ略記セル白布ヲ右腕ニ纏フモノトス

四、喇叭ノ號音左ノ如シ

演習中止	「氣ヲ著ケ、止レ」
休憩	「休メ」
演習再興	「氣ヲ著ケ、前ヘ」
解散	「解レ」

第四　集合及解散

一、集合ニ關シテハ別ニ指示ス

集合及解散ノ爲メノ輸送ハ當該學校ニ於テ計畫實施スルモノトス

二、第二日戰鬪教練終了後各部隊ハ兩軍指揮官ノ示ス處ニヨリ直ニ閲兵場ニ至リ休憩スルモノトス

三、部隊ノ解散ハ訓示後解散ノ號音ニヨル

第五　經理及給養

一、輸送、糧食、宿泊、空包費等直接其ノ學校ニ必要ナル經費ハ當該學校ノ負擔トス
二、給養ニ關シテハ各學校毎ニ計畫實施スルモノトス

第六　禁制及注意

一、服裝ヲ變シテ對敵行動ヲナシ又ハ猥リニ地方交通機關ヲ利用スルコトヲ禁ス
二、空包發火ニ方リテハ各學校毎ニ特ニ左ノ諸件ノ嚴守ヲ徹底セシムルモノトス
(1) 學校出發ノ際職員ニテ銃口ノ檢査ヲ行ヒ疑製彈ノ彈頭等ノ殘置シアラサルヤヲ十分ニ確ムルコト
(2) 小銃ハ敵ヲ隔ツルコト五十米以内、輕機及重機關銃ハ百米以内ニテ發火セサルコト
(3) 前項以内ノ距離ニ於テ射擊ヲ必要トスル場合ハ空擊ニ止メ空包ヲ用フヘカラス
但シ警報ノ爲メ又ハ夜間等ニシテ已ムヲ得ス規定以内ニ於テ發火セントスルトキハ十分銃口ヲ天空ニ向ケ發射スルモノトス
三、夜間ハ著劍及輕機關銃ノ空包發射ヲ禁ス
四、突擊ニ當リテハ兩軍共二十米以内ニ接近スルヲ禁ス

突擊後審判官其ノ場ニアラサル時ハ兩軍ハ一旦停止シ近傍ニアル審判官ニ報告シ其ノ判決ヲ待ツヘシ
審判官ヲ待ツタメ戰鬪ヲ中止セル部隊ニ對シ突擊及射擊ヲ行フヘカラス
五、敵ヲ捕獲シ又ハ銃器●帽子ヲ取ル等ノ行爲ヲ禁ス
六、鐵道及電車線路ハ踏切以外ニ於テ横斷シ又ハ線路上ヲ通行スルヲ禁ス
御着一本松間ノ舊山陽國道ハ踏切二ケ所ヲ有シ危險ニ付キ夜間ノ使用ヲ禁ス
七、演習間特ニ野井戸●野壺●池沼ニ注意スル等危險ノ豫防ニ就テハ各學校毎ニ夫々必要ナル手段ト注意ヲ與フルヲ要ス。又夜間ハ特ニ單獨行動ヲ避ケ必ス二人以上ニテ行動セシムルモノトス
八、菜園●花園●果樹園等ニ立入リ又ハ田畑ヲ踏ミ荒スヲ禁ス
九、其ノ他ノ審判及禁制等ニ就テハ陸軍演習令ヲ準用ス
一〇、猥リニ民家ニ立チ入リ又ハ焚火ヲナスヲ禁ス
夜間狀況ヲ中止シテ休憩セシムル場合ニ於テモ天幕ヲ使用スルカ若クハ學校民家等ノ土間ヲ利用シタル露營ヲ行フモノトス

第七　救護

一、各學校ハ適宜救急材料ヲ携行スルモノトス
二、各學校ハ生徒保護ノ爲メ教師ヲ附添ハシムルモノトス

第八　通報及報告

一、第二日戰鬪教練終了後速カニ各學校ハ其ノ所屬ノ高級指揮官ノ許ニ異狀ノ有無ヲ報告シ高級指揮官ハ之ヲ統監部ニ報告スルモノトス
但シ急ヲ要スルモノハ適宜其ノ都度報告スルモノトス
二、審判官(各隊長)ハ特ニ實讃ニ値スル生徒ノ行爲及演習ニ關スル所見ヲ戰鬪教練直後ニ統監部ヘ又各學校長ハ本演習ニ關スル所見ヲ十一月十日迄ニ學務部長宛提出スルモノトス
三、各中隊ハ中隊長ノ命ニ依リ喇叭ノ吹奏ヲ勵行スヘシ

第九　戰鬪教練ノ計畫

一、演習想定及教令

(一)　想　定

東　軍

一、龍野町方向ヨリ東進中ノ敵ヲ擊滅スヘキ任務ヲ有スル東軍多田支隊ハ三木町方向ヨリ二縱隊トナリテ前進シ十月二十六日十二時五十分右縱隊(四ケ大隊)ノ先頭ヲ以テ西山東方十字路ニ左縱隊(一ケ大隊)ノ先頭ヲ以テ上部南端ニ達ス
二、此ノ時迄ニ支隊長ハ左記狀況ヲ知得セリ
1　兵數略々我ト同等ノ敵ハ姫路方向ヨリ二縱隊トナリテ東進中ニシテ十二時三十分各其ノ先頭ヲ以テ深志野御着各東端ヲ通過セリ
深志野方面ノ縱隊ハ敵ノ主力ナルコト確實ナリ

西　軍

一、三木町方向ヨリ西進中ノ敵ヲ擊滅スヘキ任務ヲ有スル西軍德岡支隊ハ姫路市方向ヨリ二縱隊トナリテ前進シ十月二十六日十二時五十分右縱隊(一ケ大隊)ノ先頭ヲ以テ豆崎南端ニ左縱隊(四ケ大隊)ノ先頭ヲ以テ荒神谷東端ニ達ス
二、此ノ時迄ニ支隊長ハ左記狀況ヲ知得セリ
1　兵數略々我ト同等ノ敵ハ三木町方向ヨリ西進中ニシテ十二時三十分其ノ先頭ヲ以テ藥栗西端ヲ通過セリ

2　我カ師團主力ハ明日夕刻加古川ノ線ニ進出スル豫定ナリ

3　彼我ノ空中勢力ハ伯仲ス

三、支隊ノ編組左ノ如シ

支隊長　多田中佐
生徒隊　五ケ大隊
獨立機關銃隊　一隊（六銃編成、假設）
野砲兵　一中隊（四門編成、假設）

（二）教令

1　西軍ハ帽ニ白帶（又ハ白日覆）ヲ附ス

2　正午以後命令ヲ下達シ十三時行動ヲ開始スヘシ
　但シ斥候ハ正午以後隨時派遣スルコトヲ得

二、演習指導要領

東軍

一、十二時四十分迄ニ想定ニ示ス態勢ヲ採ラシム
　行軍序列左ノ如シ

右縱隊　Ⅱ、Ⅲ、Ⅲ、Ⅴ
左縱隊　Ⅰ
　大隊内ノ中隊ハ番號順序トス

二、十三時演習開始（號音）
　但シ各隊長ノ命令下達竝ニ斥候ノ派遣ハ正午以後隨時之ヲ行フコトヲ得

三、東軍支隊ハ大宗—上富木—神吉—砂部ノ線ニ展開シ十五時攻擊前進セシムル如ク指導ス

四、十五時三十分頃西飯坂—志方—中西西井口ノ線ニ於テ敵ト衝突スルナラン

五、衝突後約二十分間休憩ノ後約三百米後退セシメテ左記狀況ヲ與ヘ同時演習ヲ再興ス（概ネ十六時）

狀況

東軍ハ戰鬪不利ニシテ投松—天下原ノ線以東ニ後退ノ止ムナキニ至ル

六、右狀況ニ基キ戰場内退却動作ヲ實施セシメツツ後退シ直チニ概ネ左ノ通リ陣地ヲ占領セシム

大宗附近　一ケ大隊
投松及其ノ南方高地　一ケ大隊
天下原附近　一ケ大隊
山條附近　一ケ大隊

七、十六時三十分頃敵ハ東軍陣地ニ向ヒ突入スルナラン

西軍

一、十二時四十分迄ニ想定ニ示ス態勢ヲ採ラシム
　行軍序列左ノ如シ

3　御着—一本松間ノ山陽舊國道ハ夜間絶對ニ使用ヲ禁ス

2　我カ師團主力ハ明日正午頃市川ノ線ニ進出スル豫定ナリ

3　彼我ノ空中勢力ハ伯仲ス

三、支隊ノ編組左ノ如シ

支隊長　德岡中佐
生徒隊　五ケ大隊
獨立機關銃隊　一隊（六銃編成、假設）
野砲兵　一中隊（四門編成、假設）

右縱隊　1、2、3、4
左縱隊　Ⅱ、Ⅲ、Ⅲ、Ⅴ
　大隊内ノ中隊ハ番號順序トス

二、十三時演習開始（號音）
　但シ各隊長ノ命令下達竝ニ斥候ノ派遣ハ正午以後隨時之ヲ行フコトヲ得

三、西軍支隊ハ岸—長慶—横大路—藤池—西中ノ線ニ展開シ十五時攻擊前進セシムル如ク指導ス

四、十五時三十分頃西井口—中西—志方—西飯坂ノ線ニ於テ敵ト衝突スルナラン

五、衝突後約二十分間休憩ノ後約三百米後退セシメテ左記狀況ヲ與ヘ同時演習ヲ再興ス（概ネ十六時）

狀況

西軍ノ戰鬪ハ有利ニ進展シ敵ハ東方ニ退却ヲ開始セリ

六、右狀況ニ基キ戰場追擊ヲ行ハシム但シ概ネ左ノ如ク目標ヲ選定セシム

山條　一ケ大隊
天下原及其ノ北方高地　一ケ大隊
横山—投松　一ケ大隊
大宗　一ケ大隊

七、西軍ハ十六時三十分頃東軍陣地ニ向ヒ突入スルナラン

西軍突入セハ東軍支隊長ニ左ノ狀況ヲ與フ

狀況

1　敵ハ戰鬪不利ニシテ西方ニ向ヒ退却ヲ開始セリ

2　同時左記要旨ノ師團命令ヲ受領ス

師團命令要旨

「貴官ノ增援トシテ歩兵一大隊ヲ急行セシム該大隊ハ明朝二時志方ニ到著スル豫定ナリ」

八、東軍ハ決意敵ヲ追擊スルナラン

但シ別命アル迄左ノ線以西ニ部隊ヲ以テ前進スルコトヲ得ス

豐國—深志野—國分寺—御着—見野ノ線

九、前項ノ線ニ於ケル兵力配置ハ左ノ通リトス

豐國、深志野、國分寺、御着、見野ニ各一ケ大隊宛

十、東軍前項ノ線ニ進出セハ一時狀況ヲ中止ス

十一、二十時演習再興

十二、爾後夜間防禦及捜索警戒ヲ實施セシム

此ノ間二十二時—二十四時ノ間ニ於テ各大隊毎ニ約一中隊ノ兵力ヲ以テ夜襲ヲ實施セシム

十三、二十四時ヨリ翌日四時迄狀況中止

十四、二十七日四時演習再興

十五、拂曉攻擊ノ爲メ五時三十分其ノ陣地線ヲ出發セシメ六時前後兩軍衝突シテ演習ヲ終了ス

十六、朝食後城南練兵場ニ集合セシム

第十　閱兵及訓示

第二日戰鬪終了後左記要領ニヨリ閱兵分列及講評訓示ヲ行フ

(一)　集合　八時三十分

(二)　閱兵分列及講評訓示次第

一、整列　八時五十分迄ニ整列ヲ終ル

二、統監臨場　學生隊敬禮

三、閱兵

四、分列

五、指導部長講評

六、統監訓示

七、師團司令部附少將所見

八、萬歲三唱

九、統監退場　生徒隊敬禮

十、解散

突入後直チニ左記狀況ヲ與ヘ市川左岸ニ後退セシム

狀況

1　西軍ノ突擊ハ效ヲ奏セス

2　同時左記要旨ノ師團命令ヲ受領ス

師團命令要旨

「貴官ハ狀況止ムヲ得サル場合ニ於テモ西阿保高木間市川ノ諸橋梁ヲ確保スヘシ」

八、前項西軍ノ退却ハ左ノ通リ道路ヲ配當ス

山陽國道方面　二ケ大隊

志方—深志野道方面　二ケ大隊

志方—唐端新—豐國道　一ケ大隊

九、退却後ノ兵力配置ハ左ノ通リトス

東阿保、三軒屋、新田　一ケ大隊

一本松、加納原田　一ケ大隊

勅旨　一ケ大隊

小川　一ケ大隊

佐良和　一ケ大隊

十、西軍所定ノ線ニ後退セハ一時狀況ヲ中止ス

十一、二十時演習再興

十二、爾後夜間防禦及捜索、警戒ヲ實施セシム

此ノ間二十時—二十二時ノ間ニ於テ各大隊毎ニ約一中隊ノ兵力ヲ以テ夜襲ヲ實施セシム

十三、二十四時ヨリ翌日四時迄狀況中止

十四、二十七日四時演習再興

十五、敵ノ拂曉攻擊ニ際シ出擊セシメテ演習ヲ終了ス

十六、朝食後城南線兵場ニ集合セシム

統監部編成表

統監　兵庫縣知事　坂千秋

副統監　兵庫縣學務部長　森本雅雄

附　學務課長　町田稔

同　體育運動主事　木村伊勢榮

顧問　第四師團司令部附陸軍少將　遠藤春山閣下

顧問　第十師團司令部附陸軍少將　大場四郎閣下

指導部竝審判官編成表

指導部				
審判官	東軍	專屬部隊	官姓	
		支隊本部		
		I	兼井原大佐	
		II	神代大佐	
		III	伊藤中佐	
		V	秋山大佐	
			山本少佐	
	西軍	專屬部隊	官姓	
		支隊本部	兼本川大佐	
		I	原田中佐	
		II	三木少佐	
		III	兼馬場大佐	
		V	丸山少尉	
			村上大佐	

（長）乾大佐

井口大佐

井原大佐

本川大佐

馬場大佐

多田中佐

備考

一、本表外學校長及同職員ハ自己學校專屬ノ審判官ニシテ判決ニ就テハ當該大隊ノ審判將校ト連絡スルモノトス

二、審判官ハ各種ノ機會ニ於テ本演習ノ目的ヲ達成スルコトヲ主眼トシテ審判竝ニ指導ニ任シ特ニ危害豫防ニ留意スルモノトス

〔附表第三其ノ一〕

演習部隊編成表（東軍）

支長 多田中佐　副官 車田少尉

大隊號	大隊長	中隊號	編成學校	參加人員
I	大西少尉	1	神戸商業學校等高	一五〇
		2	兵庫師範	一八〇
		3	甲南高校中學部	六〇
		4	神戸二中	一九〇
		5	神戸三中	一九〇
II	奥地少尉	6	鳳鳴中	九五
		7	柏原中	九五
		8	灘中	一九〇
		9	關學中學部	一七五
		10	第一神港商業	二三〇
III	山下少尉	11	尼崎中	二一〇
		12	伊丹中	一四〇
		13	三田中	一三〇
		14	中外商	二〇〇
		15	三田農林	九五
III	高島少尉	16	神戸一中	二〇〇
		17	甲陽中	二〇〇
		18	縣工	一九七
		19	神港中	九九
		20	市立西宮商	二五
V	惣谷少尉	21	洲本中	一〇〇
		22	洲本商	七〇
		23	淡路實業	五〇
		24	第三神港商業	二三〇
		25	北神商	一四〇
合計				三、六四一

〔附表第三其ノ二〕

演習部隊編成表（西軍）

支隊長兼 德岡中佐　副官 藤少尉

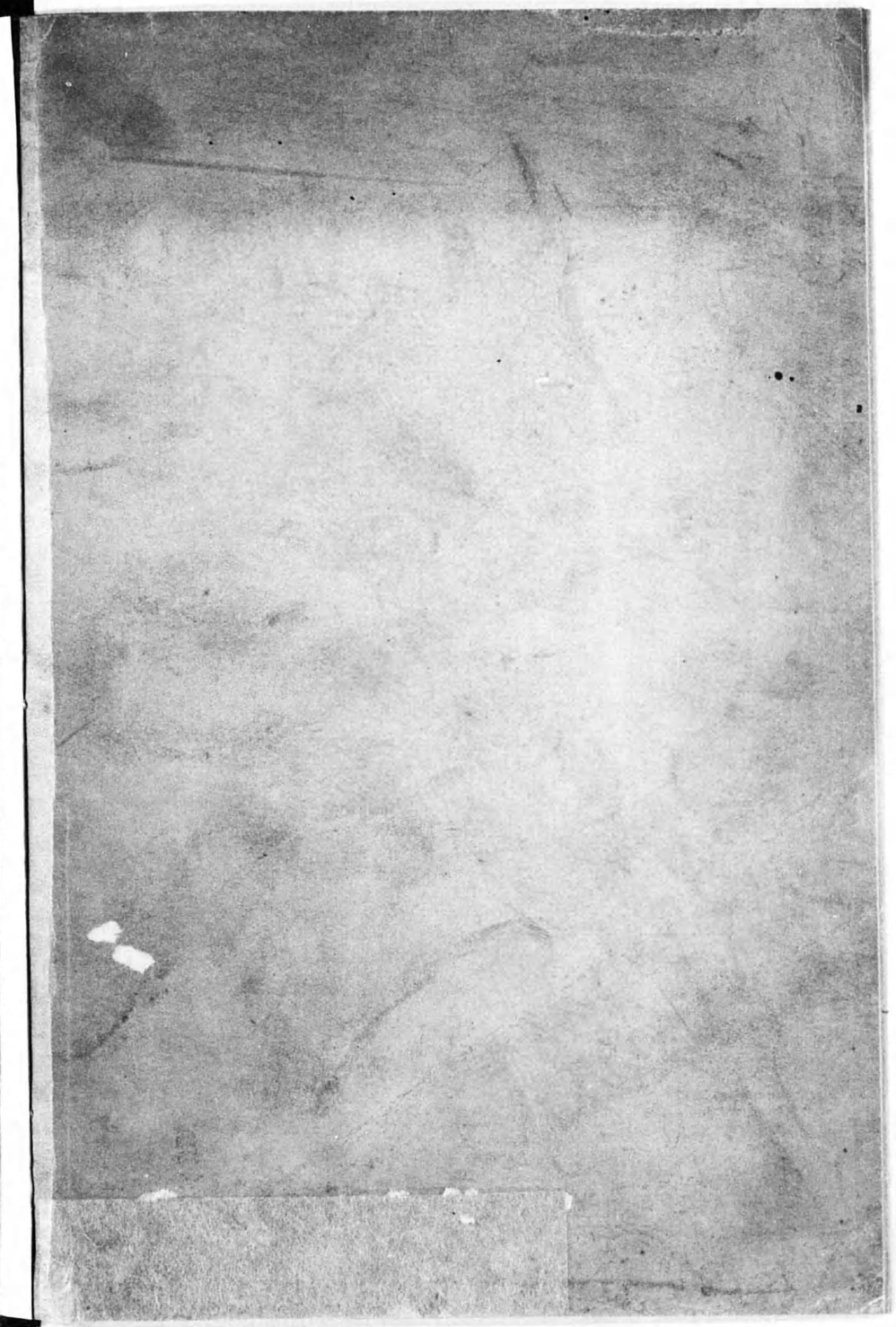
大隊號	大隊長	中隊號	編成學校	參加人員
I	坂本中尉	1	姫路高等學校	一三〇
		2	姫路中	一八〇
		3	姫路商業	一一七
		4	飾磨商業	八九
		5	佐用農	五〇
II	山下少尉	6	小野中	一三八
		7	加古川中	一四一
		8	明石中	一八八
		9	第一神戸商	一九〇
III	藤井少尉	10	龍野中	一九〇
		11	赤穂中	六六
		12	上郡農	八五
		13	龍野商	五八
III	高松少尉	14	豐岡中	一六七
		15	豐岡商	三二
		16	農蠶	九五
		17	縣農	一四三
		17	青年學校教員養成所	六〇
V	岡本少尉	18	瀧川中	一七〇
		19	村野工業	二二〇
		20	育英商	一五〇
		21	報德商	一三〇
合計				二、七八九

昭和十五年三月十日印刷
昭和十五年三月十五日發行

兵庫縣學務部

神戸市兵庫區湊町四丁目七十五番屋敷
印刷人　竹林正吉

神戸市兵庫區湊町四丁目七十六番屋敷
印刷所　合名會社巴堂印刷所
電話湊川⑤（三八九六番）（四三四二番）



終